

皆に見られる神の救い

ルカ3:1~6 / 李正雨師

ある時代の名前を言えば、その時代に関連することが思い浮かびます。例えば、昭和の時代と例えば、その時代の様々なことが思い浮かぶでしょう。当時の状況や文化、起きた様々な事件などが、その時代はどうだったかを代弁してくれるからです。今日の福音書もこのような時代についてのことが記録されています。今日の福音書であるルカによる福音書3章1~2節には、当時の支配者の名前が書かれています。支配者の名前が書かれているということは、私たちにとっていろいろな意味があると思います。メシアに関することが歴史的な事実であるということと、その時点がいつだったかを教えてください。そしてその時代相がどのような時代だったかも教えてください。支配者の名前と業績は記録として残っているからです。今日の福音書1~2節を御覧ください。「皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。」

皆様もよくご存知のように、洗礼者ヨハネはメシアの到来を準備する人でした。つまり、洗礼者ヨハネの登場は、メシアが間もなく来られるということの意味することでした。待降節が来ると、クリスマスが遠くないというのが分かるように、洗礼者ヨハネの登場は、メシアが来られるという期待を示すことでした。その時期は、1節の言葉のように、ティベリウスの治世の第15年でした。この時期の計算は、学者によって違いますが、一般的にはこの時期をAD28~29年だと認めています。ティベリウス皇帝は、ローマ帝国の二番目の皇帝でした。そしてローマ帝国の初代皇帝であったアウグストゥスは、今日の福音書の前のルカによる福音書2章1節に登場します。全領土の住民に住民登録を命じた人が彼です。この時、イエスさまがベツレヘムでお生まれになったので、ルカによる福音書2章と3章の間には、数十年の時間が経ったのです。その間、ローマの皇帝は変わり、イエスさまが主にお働きになったユダヤとガリラヤの状況も変わっていました。

続いて1節に「ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、」と書かれています。ここでのヘロデは、洗礼者ヨハネを殺したヘロデ・アンティパスです。私はこれが当時の時代をある程度示していると思います。ヘロデ大王の領土は、三か所に分けられました。ヘロデ・アルケラオスにはユダヤとサマリアが、ヘロデ・アンティパスにはガリラヤとベレアが、ヘロデ・フィリポスにはイトラヤとトラコンが与えられました。一つの国が三か所に分かれたので、ヘロデの息子たちは、王ではなく領主と呼ばれていました。この中のアルケラオスは横暴な領主でした。自分が受け継いだユダヤとサマリアを横暴に治めていたので、民たちの反感を買っていました。そしてこの反感は、アルケラオスが自分の内縁の女と結婚することを発表すると、募り募って、ファリサイ派を中心にして暴動が起きました。この時、暴動を鎮める過程で約3000人のユダヤ人が命を失いました。このことによって、ユダヤとサマリアの人々が連合しました。皇帝にアルケラオスを告発して、アルケラオスは流刑されます。そしてアルケラオスに代わってユダヤに派遣された人が、ローマの総督ピラトです。ですから、今日の福音書1節には、アルケラオスの名前ではなく、ピラトの名前が入っているのです。

ヘロデ・アンティパスも良い領主ではありませんでした。マタイによる福音書14章に書かれているように、彼は、弟の妻を奪い、自分の妻にしました。この過程で、自分の妻だったナバテア王国の王女と離婚します。これによってナバテアの王は激怒し、ユダヤを侵攻します。しかし、ナバテアもローマの属国であり、これは属国の戦争を認めないローマによって解決されます。しかし、戦

争の被害は、みんな民たちの被害になってしまいました。このことによって、洗礼者ヨハネは律法を挙げてアンティパスの離婚を指摘したので、アンティパスは、自分の恥を指摘したという理由で洗礼者ヨハネを牢に入れ、結局的には殺しました。残酷な支配者たちがイスラエルを治めていたのです。

宗教的な状況、神殿の状況も良くありませんでした。民数記25章13節によると、大祭司はアロンの系列の長者だけに与えられるものでした。しかし、ローマは自分たちの目的のために大祭司を任命し、政治的だった祭司たちは、このローマの命令に従いました。今日の福音書第2節には、二人の大祭司の名前が書かれています。アンナスとカイアフアという大祭司ですが、当時の公式的な大祭司は、カイアフアでした。アンナスもローマ皇帝によって大祭司の席に任命されましたが、皇帝が変わると解任されました。その後、何人かが短い期間、大祭司に任命され、今日の福音書に登場しているカイアフアも大祭司に任命されました。しかし、前の大祭司であったアンナスの影響力は強かったので、当時ユダヤ人たちも、アンナスを自分たちの大祭司として願いました。さらに、カイアフアはアンナスの甥でありながら婿だったので、アンナスとカイアフアが当時の大祭司として活動することができたのです。

これがイエスさまの公的な生涯の直前のユダヤとサマリア、ガリラヤの状況でした。権力者たちの横暴はひどくて、大小の戦争と迫害などは、常に起こっていました。宗教は、政治と癒着の関係にあり、神殿は、神さまの言葉に従っていませんでした。このため、民たちは肉体的にも、精神的にも、信仰的にも、元気ではありませんでした。この時、すべてのことが不安な時、今日の福音書は、神の言葉がこの世に降ったと語っています。2節の言葉です。「アンナスとカイアフアとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。」世の中に神さまの救いが到来したのです。

神の言葉を受けた洗礼者ヨハネは、悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。彼は、イザヤの預言に従って主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよと叫びました。一般的に洗礼者ヨハネといえ、このような悔い改めを思い出しますが、これだけが洗礼者ヨハネのメッセージではありません。洗礼者ヨハネのメッセージの目的は、救いが到来しているということを伝えることでした。今日の福音書6節は、その目的を明らかにしています。「人は皆、神の救いを仰ぎ見る。」みんなに見られる神の救い。これがいつも不安を抱いて生きていた民たちに臨んだ神さまの御心でした。

今、私たちが生きているこの時代は、今日の福音書の時代とは違います。しかし、私たちもいろいろな苦しみを抱えて生きています。未来への心配、世代間の違い、自然災害への恐れ、親子間の欠けているコミュニケーション、戦争、独裁、健康、コロナまで。多くのことが私たちの生活に苦しみを与えています。このような状況にいる私たちに、神さまは、今日の福音書を通してご自分の救いがあるということを私たちに言われます。心配と恐れの中にいる人々に、失敗と挫折の中にいる人々に、神さまの救いが臨むということを教えてくださいました。クリスマスが近づいています。私たちは約3週後、クリスマスを迎えます。この日を意識して過ごす人も、そうではない人もいますが、クリスマスは、この世に神の救いが臨んだということを示す日です。この救いは、私たちみんなが苦しみの中から救われるものであり、私たちの希望になるものです。これを信じて、信じなくても構いません。神の救いは、すべてのことを越えて私たちに臨むからです。この救いの喜びが私たちだけでなく、私たちの隣人とも共にありますように願います。苦しみの中にいる人々にこの救いをもっと明らかに見られるように。すべての人に、神さまの救いが臨まれるように、主の御名によって祈ります。アーメン